

「Advances in Drug Therapy of Gastrointestinal Ulceration」 Biological Council Symposium on Drug Action

Edited by Garner A & Whittle BJR

大阪市立大学教授

小林 絢 三

消化管粘膜は、様々な外的(ストレス、食物、薬剤など)ならびに内的(胃液、腸液など)な傷害因子に曝露されているが、その結果、粘膜にはびらん、潰瘍などが発生する。これらの病態は良性であるにしても、出血などを惹起し、致命的な場合もありうる。この病態、すなわち存在ならびに質的診断についてはわが国の卓越した方法論により相当のところまで明らかにされたと言えるが、その病因あるいは詳細な病態については未だ不明な点が多く、その大部分において欧米に追隨しているのが現状と言える。すなわち、分子生物学領域においてしかりである。

本書は、ロンドンで毎年春に開催される“The Biological Council Symposium on Drug Action”の記録であり、1988年に開催されたのは38回目に当たるという。テーマとして消化性潰瘍を中心としたgastrointestinal ulcerationが選ばれ、また、organizerとしてA. GarnerとB. J. R. Whittleが指名されている。両研究者とも、消化管粘膜病変

に対する実験病態生理学の分野において世界をリードする学者である。

今日、胃・十二指腸潰瘍に対する薬物療法として、酸分泌抑制剤であるH₂ブロッカーが臨床的に評価され、更にproton pumpのinhibitorであるomeprazoleが市場に登場する準備が進められている。しかし、動物への長期投与によりcarcinoid tumorの誘発の危険性が指摘されている。こうしたことから、消化管粘膜病変の病態生理を踏まえたうえで、新しい抗潰瘍薬の開発が期待されている。このような背景の中で、本書がどのような必然性で出版されたか考えてみると、その前半では、消化性潰瘍の治療について、現在開発中のものも含めた抗潰瘍薬の薬効薬理あるいは臨床評価についてのup-to-dateのreviewが各著者により解説されている。これらの中ではH₂ブロッカー、omeprazoleならびにPG誘導体についての歴史的な流れのみならず、今日的展望についても触れられている。また、既存の制酸剤、あるいはcytoprotective agentsにつ

いても、新しい方法論による再評価がなされた報告である。

特に、W. Beil執筆のproton pump inhibitorの項では、新しいinhibitorであるSCH 28080が紹介され、更にtricyclic antidepressants(三環系抗うつ剤)のproton pumpに与える影響など、新しい話題が盛られている。

また、PG誘導体については、基礎データと臨床との乖離についてC.J. Hawkeyが鋭い解説を加えている。

後半においては、消化管粘膜傷害とその防御についての基礎的研究に関する報告がなされている。すなわち、胃粘膜防御機構における末梢ならびに中枢神経系調節、アラキドン酸カスケード、ペプチドホルモン、細胞回転などの役割と意義につき、G. Flemström, S. Szaboなどが解説し、最後にA. Garnerが新しい抗潰瘍薬のfuture marketについてまで言及している。

わが国において、胃・十二指腸潰瘍を中心とする消化管病変の病態と治療についての基礎から臨床にわたる重要な問題点をすべて網羅し、しかもそれぞれの分野で世界をリードする研究者を集めたシンポジウムは現時点では望み得ない。こうしたことから、本書は、この領域における研究者にとって現状を把握し、展望を考えるうえで必読の書と言える。

A 5 判変型 306 pp with figs. 1989
定価 18,590(税抜き)

John Wiley & Sons(日本総代理店 医学書院洋書部 ☎ 03-817-5670)